

奥の湿原で本当にこれが今回最後となる美しい風景を見届けた私とスンは、洛絨牛場まで戻ってきた。私はこの道を今回の旅だけで一週間の間に4往復もしてしまっただ。さようなら、またきっと来るから・・・道端の岩や木や小川の流れに向かって心の中で呼びかけながら歩いた。

洛絨牛場に戻ると、牛飼いの小屋の前ではあの小さな小娘が弟を遊ばせていた。2歳だという弟は歩けるようになったばかりらしく、足元はまだおぼつかない様子なのに、姉が手を放すと私達がビックリするようなスピードでタタタッ・・・と草の上を駆け出したかと思うと、足がもつれてバーンと激しく転んだ。いつもお母さんに大切に見守られている甘えんぼうの子供なら、これだけでも泣き出して抱っこをせがみそうな年頃なのに、彼は転んだ事など意に介さぬ様子で助けに駆け寄った姉の手を振り解き、再び勢いよく走っては転ぶのを繰り返していた。きっと走る事が楽しいのだろう。ヨチヨチ歩きにしては駆け足のスピードもずいぶん速い。チベット族の子は強いんだなあ・・・。

小屋を覗いて声をかけると、初めて会った時には警戒の色を隠さなかった老婆が笑顔で手を振ってくれた。

洛絨牛場から自然保護区の入り口までスンは待たせてあった馬に乗って帰るのだが、私は徒歩だ。道は下りだし馬は馬方と同じ速度で歩くので、着いていかれない事は無いがやっぱり速い。更に道は昨夜の雨でグシャグシャのドロドロだ。ひいいい～！しみじみ亜丁との別れを惜しむような余裕も無く、ズボンの裾を泥だらけにしながらせわしなく歩いた。

どうやら自然保護区の入り口近くまで辿り着きホッとしていると、突然後ろからやって来た少年が「你好！」と呼びかけてきた。誰かと思えば、初日に私のザックを沖古寺まで担いでくれた16歳のポーター少年だ。あの時は無粋な兄の出現で気まずい別れ方をしてしまったが、この時の少年は、まるでそんな事は無かったかのよう笑顔で浮かべていた。

「亜丁はどう？君の友達にはあえた！？」

「うん！会えたの！！すごく嬉しかった～」

「それは良かったね！僕も嬉しいよ。それじゃあ元気で」

赤い頬をした可愛い少年は手を振って去っていった。この一件ですっかり良い気分になって歩いていると、大

人に混じり、大きな荷を背中に背負って歩いてきた少年が声をかけてきて、ポケットから折り鶴を取り出して見せた。あ！あの雨の日に沖古寺の折り紙講習と一緒に折り紙をして遊んだ子だ～！！13歳くらいの年頃と思われるこの少年は、誰よりも覚えが早く目を輝かせながら上手に折鶴を折っていた子だ。

少年が得意そうに差し出して見せてくれた折鶴は、私があげた折り紙ではなく何か別の紙を使って折られていた。あの時にしっかり折り方を覚えてしまい、自分で調達した紙を切って新たに折られた物なのだろう。これまでもアジアの国をあちこち旅して、色々な場所で折鶴を折って見せてきたが、紙の角がぴっちり合うように重ねながら、細かい行程を繰り返して作り上げていく折り紙は、手先の器用さと繊細さが求められ、そんな遊び方をした事の無い国の子供達に教えても、ちゃんとマスターして自分で折れるようになる子供は意外に少ない。この子は頭が良いんだな・・・

私はこうして遊んでいるというのに、まだ大人にもなる前の少年が汗を流して重そうな荷をせおい、煤けた服を着て働いているのを見ると胸の奥の方がちょっぴり切ない。私の亜丁の友人のように、都会の学校に勉強に出るチャンスを得られる子供もいるが、この子の家庭はどうなのだろうか。こんな利発な少年が山間部の小さな村で暮らし、この先高い教育を受けるチャンスに恵まれないまま、田舎で肉体労働をする生活を送って大人になるのだとしたら・・・

彼の差し出した折鶴に「很好！」と親指を立てて見せると、少年は嬉しそうに笑顔を見せて「それじゃ、仕事だから行くね」と手を振った。去っていく少年の後ろ姿を見ながら、私は思わずその背中に向かって心の中で呼びかけた。

『少年よ・・・、大志を抱け！』

これで本当に最後かと寂しい気持ちになりかけていたが、思いがけない二つの再会は亜丁の最後を飾るのに相応しい嬉しい出来事に思えた。これで今回は心置きなく亜丁を去って行ける気持ちになった。

自然保護区の入り口では先に下山していた北京軍団の二人と、馬で先に着いていたスンが待っていてくれた。

車が走り出すとスンが言った。

「小姐、これから君はどうするんだ？このまま俺たちと稲城に行くのか？それとも亜丁村で降りるのかい？」

先発した彼らの仲間は既に稲城に到着している頃だし、スン達三人の荷物も朝のうちに車の中に積み込んであった。彼らの予定はこのまま亜丁村に立ち寄り事なく通過して、稲城に向かってしまうのだ。もし私も稲城まで彼らの車に乗せて貰うのならば、宿に戻っても残してきた荷物を取ってスグに出発しなければならない。

一瞬、昨夜会いそびれていた亜丁の少年の事が頭をよぎった。このままこの土地を出てしまえば、またサヨナラの挨拶もできないままお別れだ。そう考えると切なかった。せめてもう一度会って別れの言葉くらい伝えたい・・・。

だがあのパーティの時に彼は成都の学校に戻るために明後日この村を出るという話をしていたのではなかったか。今ここで村に残っても少年に再び会えるという確証もなかったし、昨日の半日だけで時間を持て余しかけていた亜丁村に、もう一日滞在してもやる事は残っていないように思われた。しかもこの後一人で稲城まで戻るには、帰りの交通機関を調達するために道路を通る車をヒッチハイクしなければならない状態だ。切ない気持ちを押し殺して言った。「うん、私も稲城まで一緒に連れて行って下さい」

亜丁村の宿に戻ると慌ただしく荷物をまとめて、宿の主人に挨拶すると再び車に乗り込んだ。車はスグに発車して私がバイクで走った坂を登り、あっという間に村を見下ろす峠のカーブを曲がるともう亜丁村は見えなくなってしまった。晴れていれば聳え立つ『仙乃日』の姿が見られる筈だが、やっぱりこの日も神山の姿は雲につつまれていて見る事はできなかった。亜丁からどんどん離れていく車の中で、私は無性に寂しかった。

いつの間にか車の後部座席でぐっすり眠ってしまっていた。車が揺れて停車するのを感じて、目を覚ました私の耳に、「チッ！参ったなあ～」と、うんざりしたような声をあげ舌打ちする北京軍団の話し声が聞こえてきた。いったい何があったんだろう・・・、車外のざわめきに薄目をあけて窓の外を見ると、何処かの村の道路沿いに市が立っているらしく道端には野菜やきのこ類などがギッシリ並べられていて、道路はそれを目当てに集まってきた村人達でごった返していた。とても車が通過できる状況では無いが、それより何だかとっても面白そうじゃないか～。私は出来る事なら車を停めて、この定期市のようなものを見物したかったが、北京軍団の男達はそんな物には全く興味が無いらしく、村人達に毒づきなが

ら派手にクラクションを鳴らし続けると、道路の人垣を蹴散らすように無理やり車を発進させた。何とか人ごみを通りぬけた車の中で、料理補助の男が村人達を蔑むような笑い声をあげ「全くどうしようもねーな、あいつらは・・・」とつぶやく声が聞こえてきた。

何で？あなた達はこの土地に興味があるから旅行しにやってきたんじゃないの？勝手に人の土地に入ってきて、なぜその土地の人達を悪く言うの？この数日間の疲れと早朝から北京軍団の馬を追いかけ激しく歩いた今日一日の疲れがいきなり噴き出していた私は、完全に目を覚ます事ができないまま再び目をつぶり、ボンヤリと考えていた。

亜丁村を出て数時間後、見覚えのある稲城の街中に到着した車は、一軒のホテルの敷地の中に入って停車した。先発隊があらかじめ取っておいたホテルの名前と所在を携帯電話で連絡を受けていたのだ。車から降りると、先に着いていた石頭達が仲間を迎えに出てきていた。

「小姐、君はどうする？このホテルに泊まるかい？」

彼らの宿泊している部屋の値段は200元という事だった。日本円にして3千円といったところだ。日本人の感覚で言えば決して高い値段では無いだろうが、今回の旅で私がこれまでに泊まってきた宿の値段は平均して20元。更に中国元の手持ちが心もとない私としては、200元など分不相応な法外価格だ。

「無理無理～！！そんな高い部屋には泊まれないわ！」私が声をあげると、ホテルの受付にいた女の子が向かい側に建っている、別棟の建物を指差すとあちらの部屋なら、テレビも付いて30円で泊まれますと勧めてくれた。テレビは別に必要なかったが、勿論私は即承諾だ。お金を払うとその場にいたホテル従業員の女の子が私を部屋に案内してくれた。

中庭を横切って建物の階段の下に着くと、案内してくれていた女の子が「手伝います」と私が担いでいるザックのひとつを取り上げながら「亜丁は楽しかったですか？」と私に尋ねた。「あれ？何であなたは私が亜丁に行ってた事を知ってるの？」不思議に思い聞き返すと、彼女は言った。

「私、あなたに会った事があります」

「え？」

驚いて彼女の顔を見つめ返した私は、何かが頭の中

にひっかかっているような気がして咄嗟に尋ねた

「あなたの名前は!？」

「シャアムウ・・・」

一瞬稲妻が光ったように、最初に稲城に到着した時にバス停でホテルの客引きをしていた女の子が道案内をしてくれた記憶が頭の中を閃いた。

「ええー!!! シャアムウ!! あなただったの~!？」

思わぬ再会の喜びに思わず彼女をぎゅっと抱きしめた。

「あなたにまた会いたいと思ってたの~!!」

何故か私の記憶の中のシャアムウはまだ中学生程度の小さい女の子だったような気がしていたが、今日の前にいる彼女は18歳くらいだ。

「だから、気がつかなかったのよ」とそれをシャアムウに告げると、「私、一週間でそんなに成長したの?」と笑っていた。まだ一人旅の始め頃で、まだ微かに心細さを抱えていた私に優しくしてくれたシャアムウ。再び稲城に戻った時は彼女のホテルに泊まりたいと思っていたが、亜丁にいる間の色々な出来事や登山の疲れですっかり忘れていた。それなのに偶然泊まった場所がシャアムウのいるホテルだったなんて!!まるで神様が引き合わせてくれたみたいだ。今回の旅では本当に神様に守られているような気持ちになる偶然がとっても多い。きっとこの土地にはチベットの神様が本当にいるのだ。私がこの地を訪れた事を歓迎し見守っていてくれるのにちがいない。

北京軍団のホテルと同じ敷地の中に建っている、安部屋の建物はホテルというよりアパートか団地のような造りで、中庭に面した外の通路を歩いて自分の部屋のドアを開けるとそこにワンルームの部屋があるという仕組みだった。シャワーは共同のようだ。だが稲城に戻ってきたらシャワーなんて必要ない。亜丁の山の中で5日間もお風呂に入っていない私の頭の中は、一週間前にアロンに連れて行かれた『浮世辺絶温泉』の事でいっぱいだった。亜丁村にいる時から稲城に戻ったら、まず真っ先にあそこに行こうとずっと楽しみにしていたのだ。部屋に荷物を置いて一休みすると、すぐに階下へ降りて行ってシャアムウにタクシーで温泉に行きたいとお願いすると、ホテルの外で客待ちをしていたらしいタクシーの中から、自分の友達だという若い青年の運転するタクシーを呼んできてくれた。

私がタクシーに乗り込むと、シャアムウが「バス停に客引きの仕事をしに行くから乗せて行って」と一緒に乗り込

んできた。バスターミナルの前に車を停めて、お客を乗せた長距離バスがやってくるまで3人でお喋りしながらバスの到着を待った。タクシードライバーは気立ての良い優しい青年で、やはり商売はあまり得意でないらしく、競争の激しい稲城のお客争奪戦では苦心しているようだった。亜丁まで乗っていく日本人のお客さんをつまみ食いから、自分のタクシーを利用してくれるよう、日本語で宣伝文句を書いてくれと名刺を取り出し、私は彼の希望の文章をタクシーの名刺に書き込んであげた。そんな風に過していると、先ほどまでは、友達の少年と中途半端に別れたまま亜丁を出てきてしまった寂しさが尾を引いていて沈みがちだった気持ちが癒されて、胸の中を温かい気持ちが満ちてくる。色白でふっくらした頬と切れ長の大きな目をした可愛いシャアムウ。何だかずっと前からの友達のような気がしていた。

バスが来てシャアムウがホテルの名刺を手に握り締め車から降りていくと、私は温泉に向かった。この場所に来たのはほんの一週間前の事なのに、なんだかずいぶん時間が経ってしまったような気がした。温泉宿の中に声をかけると宿の女将の老婆が出てきて、私の顔をみると笑顔を見せた。

「私の事、覚えてる?」

「ああ、勿論覚えてるよ。あれからあなたの友達も二人でまたやって来たんだよ」

え?友達ってアロンとシャオチンの事?老婆に聞き返すと確かにそうで、しかも老婆の言うことには二泊もしていったのだそう。何だ~、あの日亜丁で別れた後、二人はまたここに泊まりに来ていたのだ。結局アロン達はここの温泉に4泊もしていたという訳だ。せっかく香港からはるばるやって来たのだし、それだけ時間があつたのならもっとゆっくり亜丁の美しさを見て欲しかった気もしたが、やはり此处が気に入っていたのだろう。

通常の旅行者なら日帰りか一泊二日程度しか滞在しない亜丁に一週間も滞在していた私とて同じ事だ。それにここの温泉宿は本当に素晴らしい。お風呂もいいが、何より宿の人が温かく迎えてくれるこの雰囲気人間好きのアロンも惹きつけられていたのだろう。温泉にはゆーっくり入りたかったので、タクシードライバーには2時間後に迎えに来てくれるようお願いした。

「ええ~! 2時間も~!？」と呆れる彼に「もし貴方が迎えに来てくれないと私は困っちゃうから、お金は稲城に戻ってから払うわ」という私の申し出にも、気のいい青年は快く承諾してくれて「じゃ、2時間後に」と走り去って行った。(次号に続く)